

ソーシャルワーク実践におけるネガティブな経験の捉え方に関する一研究

—特養生活相談員の肯定的な語りに注目して—

○ 社会福祉法人同和園 孫 希叔 (006969)

キーワード：生活相談員、ネガティブな経験、肯定的な意味づけ

1. 研究目的

ソーシャルワーカーは日々の実践において様々な出来事を経験する。その経験には、嬉しかったり、感動したりするポジティブなものもあれば、悔しかったり、辛かったり、時には耐え難いものだと感じ、思い悩んでしまう等のネガティブなものもある。そして、これらの経験から様々なことを感じ、自分にとってどのようなものであるかを意味づけ、影響を受けている。ここで興味深いのは、ポジティブな経験が個人にとってプラスとなるように受け入れられることは容易であるが、ネガティブな経験が、必ずしも否定的な影響を与えるのみではないということである。ネガティブな経験にいつまでも苦しむだけでなく、それを乗り越え、何らかの肯定的な意味を見出し、ひいてはソーシャルワーカー自身の「成長」や「発達」ともいえる特徴が見受けられるからである。

ソーシャルワーク実践におけるネガティブな経験が、単に行きづまりや破局というような事態を表すだけでなく、むしろ成長や発達への積極的な可能性を含んだものとして作用しているならば、それらはどのように捉えられ、どのようにして肯定的な意味づけを持つに至ったのだろうか。ネガティブな経験の捉え方や意味づけの具体的な中身を明らかにする試みは、ソーシャルワーカーの成長する必然性を形作ることにつながり、実践現場のソーシャルワーカーの理解に役立つものと考えられる。本研究は、こうした問題について探っていくものである。

2. 研究の視点および方法

ソーシャルワーカーが自らの実践の中で直面するネガティブな経験をどのように捉え、どう意味づけているのか、またどのような過程を経て肯定的意味づけになるのか、それに影響するものは何かに注目し、その構造や作用を明らかにすることを分析視点とした。

分析対象は、社会福祉士の有資格者として10年以上の実務経験を有し、組織の期待を認知する立場にあり、実践上一定の力量が認められる12人の調査協力者に対して半構造化インタビューを行った。インタビュー調査は、2015年7月から9月までに行われ、その様子をすべてICレコーダーで録音した。

具体的な分析方法は、インタビューを録音したデータを文字化し、1次資料として用いた。その1次資料から概念を抽出した。その後、概念のまとまりをサブカテゴリーおよび

カテゴリーとして形成し、概念やカテゴリーの関連性を全体関連図に書きだした。なお、分析の妥当性と信頼性を確保するために、調査協力者と報告者間で慎重に検討し、意見の一致を得られたものを採択した。

3. 倫理的配慮

本研究に協力を得られた調査協力者に対し、インタビューの当日、研究の目的、研究方法について書面及び口頭で説明を行い、同意書によって研究参加の同意を得た。なお、分析データはすべて個人が特定できないようコード化し、録音した音声情報は、報告者が逐語化した後、速やかに消去した。その他、本学会研究倫理指針に基づき研究を進めた。

4. 研究結果

12名のソーシャルワーカーの語りから、ネガティブな経験への対処の仕方、辛くなくなったきっかけ、どのようなプロセスを経て、肯定的な意味づけをしているのかを明らかにすることで、ネガティブな経験の捉え方に関する示唆を得ることができた。まず、ネガティブな経験には【予測不可能性】【不可抗力】【喪失感】【理不尽さ】の4つのカテゴリーが抽出された。また、ネガティブな経験をしている時の対処の仕方には、【静的受け入れ】【動的受け入れ】【静的否認】【動的否認】【一時的混乱】の5つのカテゴリーに分類された。また、つらくなくなったきっかけとしては【他者の支え】【内的な変化】【時間の経過】【問題の解決】【環境の変化】【その後の良好な人間関係】の6つのカテゴリーに分類された。さらに、それらのネガティブな経験を通して、現在どのような肯定的な意味づけを見出しているのかを分析すると、【自分自身の成長】【新しい人間関係の構築】【不確実な意味づけ】の3つのカテゴリーが見出された。ネガティブな経験を肯定的に捉える過程は、ただ一方的に進んでいくのではなく、行きつ戻りつを繰り返しながら、相対的に肯定的な意味づけが大きくなっていくことが明らかになった。

5. 考察

ソーシャルワーカーの中には、「その経験があって今の自分がある」「自分を成長させてくれたと感じている」とネガティブな経験を肯定的に捉えている人が多くいる反面、その逆の者もいる。本研究では、ネガティブな経験を肯定的に捉えることによって、自分に対する過剰な自信を軽減するなどの考え方が変化したり、実践の選択の幅が広がったりするなど、単にマイナスに作用しないだけでなく、個人の成長に結びつくような積極的な意味づけがなされていることが明らかになった。

今後は、本研究で得られた知見を手掛かりに、より一般化されうるネガティブな経験の肯定的な意味づけについてより多くの対象者で検証し、洗練させていくことが必要である。